

## 中国武術の文化産業化：少林寺武術を事例として

Industrialization of Culture in Chinese Martial Art:  
Shaolin kungfu as a case example

村橋 俊之 (Murahashi Toshiyuki) 指導： 寒川 恒夫

本論文の目的は、武術の文化産業化を少林武術を事例として記述することにより、中華人民共和国成立以後、スポーツとして制度化された伝統武術が、中国文化の象徴としてナショナリズムの中心に位置づけられる過程を明かにし、武術表象がどのような内容を含んでいるかを記述することにある。特に、武術を題材にしたミュージカルにおける少林寺武術の表象のされ方と実際の少林寺における武術復興の試みに焦点をあて、武術がどのように再文化化されているかを考察する。

第1章から第3章において、改革開放以降の文化制度改革をとりあげ、国の公益事業としてのみ行われていた文化政策が市場経済の論理を導入した文化産業政策へと変遷した経緯を論じる。天安門事件を前後して政府は伝統文化に対する態度を転換する。近代的ナショナリズムの柱であった反伝統主義を破棄し、新たに文化保守主義をその重要な構成要素とした。マルクス主義や毛沢東主義が民衆の信用を失ったために、中国文化に訴えることで統治を正当化し始めたのである。さらに、1992年以降、鄧小平が中国の経済制度を『社会主義市場経済』と理論的に明確化して以降、文化産業化が国の経済発展計画の重要要素に位置づけられる。

その結果、伝統文化としての武術の価値が再認識され、中国各地で武術を利用した産業振興が試みられるようになる。

第4章では、『功夫伝奇』（以下『伝奇』と略す。）、『印象・劉三姐』（以下『印象』と略す。）、『禪宗少林・音楽大典』（以下『少林』と略す。）の3つのミュージカルを事例として、地域における文化産業化政策と武術表象の関係を考察する。『伝奇』は、少林寺武術を主題とし、純一という子供が禪と武術修行を経て住職になるまでの苦難の過程が描かれる。『印象』は、桂林市陽朔県の漓江沿いに設定された野外舞台で劉三姐という民間に伝わる民歌の歌い手をモチーフとし、少数民族の風俗、漁民の生活などを融合させた壮大な野外ショーである。『少林』は、河南省登封市にある嵩山のふもとに野外舞台をつくり、少林寺自体も投資や制作に関与した、禪と武術をテーマにしたミュージカルである。

『伝奇』を制作した曹曉寧と『印象』・『少林』の芸術監督をつとめる梅帥元は、かつては省立芸術団の団長を努め

ていたが、後に独立して自らミュージカル制作・運営会社を起業した人物である。2人の経歴と会社設立の過程は、1990年から2000年にかけて国の文化産業化政策を体現した典型的な事例とみなされる。『印象』では、国の文化政策、地方政府、市場が複雑に絡み合う社会主義市場経済下での文化の位置づけを理解し、『伝奇』と『少林』では、武術がどのように本来の文化から異文化混淆的に脱文脈化されるかを考察する。そして、それらが共にオリエンタリズムによって外部から規定された中国像を積極的に流用する言語戦略を用いていることを指摘する。

第5章と第6章では、1980年から始まった少林寺武術の復興の経緯をとりあげ、その過程における武術表象の変容を考察する。現在、実際に少林寺を訪れても『伝奇』の描く本物の少林寺武術は存在しない。1978年当時の少林寺は武術の伝統も断たれた寂れた山寺であった。それが経済改革による少林寺の観光化によって武術の復興を成し遂げる。現在では、観光客向けの本物の武僧による少林寺武術ショーは観光客に最も愛されるイベントになっている。第5章では、釈永信方丈のライフヒストリーに焦点をあて、彼が少林寺武術をショー化することにより文化的な価値を持つ商品ブランドとして作り上げた過程を記述する。その表象内容においては『伝奇』同様のセルフオリエンタリズムのイメージ戦略が用いられ、それが少林寺武術を再構成する際の効果的な武器となっていることを指摘する。第6章では、少林寺が2000年初頭から強化され始める国の文化財保存政策に対応し、武術のショー化路線を修正し、少林寺武術は保存されるべき失われつつある伝統文化であるという言説を作り上げる過程を記述する。

最後に、こうした少林寺の試みに対して、『少林寺武術は本物の武術ではない』という新たな言説が生まれてきた背景を考察する。中国の社会主義市場経済化路線は中国社会に大きな構造変化を生じ、それによって武術に対する価値基準も大きく組み替えられた。少林寺の武術変容は、一旦はスポーツとして制度化された武術が、中国文化を象徴する伝統文化として『再文化化』される過程である。しかし、それはかつて存在した伝統武術と同等ではないがゆえに、過去へのノスタルジーを喚起する。『本物の武術とは何か』という問いは、社会が近代化する過程において必

然的に生じる『伝統』と『近代性』との軋轢を表す新たな  
言説の誕生なのである。